

2018 年度 S セメスター留学プログラム（留学先：ソウル大学校） 報告書
東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科韓国朝鮮研究コース 3 年
渡邊 暲太

1. 初めに

私は 2018 年度 S セメスター留学プログラムに参加し、韓国のソウル大学校に短期留学した。私は後期の進学先で教養学部地域文化研究分科に内定しており、専攻である韓国を中心としたアジアの文化について現地で学びたかったことからこの留学を志願した。私は 2017 年度 A セメスターから短期留学を開始した為、計 10 か月をソウルで過ごした。今回はそのうち、3 月から 6 月までの期間について振り返っていききたい。

2. 前学期までの経過

このプログラムに志望した動機は、韓国語能力の向上と自らの専攻である韓国朝鮮文化について学ぶ事だった。韓国語に関しては、2017 年度留学とその後の冬季休暇の間、ソウル大学校の言語教育院に通い TOPIK6 級程度までの語彙や文法とプレゼンテーションや論文の書き方について学んだ。そのため、2018 年度からは、韓国語での講義やネイティブとの会話を中心により実践的な語学能力を身につけることを目標とした。また、自らの専攻についても、2017 年学期は英語で行われる留学生向けの講義が多かったが、今回はソウル大学校の学生と同じ講義を中心に受講し、より専門性の深い知識を得ることを目標とした。

3. 講義

今回の留学では東アジアの文化に関するものを中心に、東アジア国際政治経済、東アジアの歴史紛争、韓国近代小説の理解、日本大衆文化、中国語初級の計五つの講義をとった。その中で、韓国文学入門は英語、それ以外は韓国語で

行われた。このうち、東アジア国際政治経済と日本大衆文化では教授が日本語を話すため、授業中の質問や意見等を日本語ですることを許可されたが、課題等は全て韓国語で課された。それでは、一つ一つの授業に関してより具体的に述べたいと思う。

東アジア国際政治経済は大テーマとして、西洋で発展した国際経済レジームが東アジアに適用されていく過程とその限界を探るもので、講義の前半の内容では中国、日本、韓国の第二次大戦以降の経済成長の過程、そして後半の内容では現在の国際経済における関係について学んだ。経済成長の過程に関しては韓国の推移を軸に日中米の関係が説明されるスタイルだったので、日本の高度経済成長やバブル経済を異なる視点で解釈する契機となった。また、後半では、欧州連合や ASEAN のような国際機関の成立や西洋の国際経済学の発展にも触れながら、東アジア3国が FTA、TPP やその他の多様な手段で国際化を果たしつつも、東アジアエリアとして統合することへの現時点での限界について学んだ。私は前学期の講義で、東アジア共同体の構想についてチームプロジェクトを行ったことがあり、それについてより専門的に踏み込んでいく内容だったので非常に興味深かった。

東アジアの歴史紛争は前学期に日韓の歴史認識に関する講義を聞いたことに続けて。日韓の歴史問題に関してもう一度整理し、中国やモンゴルなどと韓国の歴史問題に関しても基礎的な部分を学びたいと思い、受講を決めた。私と中国やロシアの学生もいたので、それぞれが教育課程においてどのように学んできたか日韓中露の学生で共有することもできた。また、ある見解が国民に伝わり、論争になり、ナショナリズムを構成する要素となるまでには、教育やメディアの機能がひじょうに大きいことや、議論されるまでもない程度の偽の歴史が支持を受ける過程、原因などを学んだ。

韓国近代小説の理解は留学生を主な対象とした英語の講義で、韓国の植民地時代から漢江の奇跡あたりまでの時代を扱った小説や映画を鑑賞しながら、当時の歴史について学ぶという内容であった。主な作品は、小説では『A Stray Bullet』、『The Poetry of John』、映画では『Peppermint Candy』、『JS A』、『I Can Speak』などであった。小説の二作品は韓国の朝鮮戦争後の貧困について扱っており、今まで看過していた部分を学ぶ機会ともなった。映画に関しては歴史や政治に関するテーマではあるもののフィクションであるために、映画から歴史を学ぶということはあまりなかったが、むしろある時期にあ

るメッセージが込められた映画が作られたということ、つまり制作された時の背景に関心を持った。例えば、『JSA』は韓国と北朝鮮が比較的友好であった時期であるとして、両軍の絆を強調する内容であった。前学期にも韓国の朝鮮時代の文学に関する講義も取っており、今回と含め、あらゆる時代の韓国文学に触れる機会ができ非常に良かった。

日本の大衆文化の講義では、アニメーションや漫画といった代表的なものから、東京、大阪の都市開発や、地方の衰退などの課題まで、様々な日本の近現代の現象が取り扱われ、韓国の視点から見ることで日常的な風景から様々な特徴が見出されていく点が非常に興味深かった。日本のキャラクター消費が日本の女性の社会進出と連関している、また BL 漫画が一般化する中でより古くに見られたような異性愛漫画の男女描写が同性愛にも影響している、と言った非常に独特な切り口での解説が非常に面白かった。また、この講義では嫌韓を扱ったり、学生が日本のステレオタイプを強調して発言したりするシーンも多く見られた。その中で、教授が文化を研究するにあたっての信ぴょう性やリスクについて付け加えて論じていて非常に参考になった。日本人が持つ日本の文化への認識と講義での説明はほとんど差がないように感じられ、日本人や日本に在住経験がある学生も多く参加していた。教授も日本人の反応について興味を持っており、私たちが積極的に参加出来るようによく手助けしてくださっており、韓国語で撮った講義にもかかわらず、言語や進度への心配も少なく済んだ。

中国語初級に関しても前学期に取った同講義に続いてもう一段階上のレベルの中国語を韓国語で学んだ。講義は、韓国人の講師による文法・語彙の授業と中国語ネイティブの講師による会話の授業に分かれており、単なる座学だけでなく、発音や会話表現に関しても矯正してくれ、非常に役に立ったと感じている。

4. 生活

以下、ソウル大学校での生活について書き留めたいと思う。私は留学当初に機会を逃してしまい、サークルや留学生の交流団体などには参加できなかった。しかし、私は1年生から現在までベストプログラムに何度か参加しており、そ

こでできた友達とは留学前からコミュニケーションをとっていた。特にそのうちの一人は、韓国での生活を開始した時も様々なサポートをしてくれたり、授業の評価などの学校の手続きなどを教えてくれたりした。致し方ないことではあるが留学を始める前後は何十もの手続きをしなければならず、また言語の障壁などによりトラブルも幾度となく発生した。その際に、その友人がメンターとなって対応をしてくれたことで大いに助かった。また留学を続けていくうち、私が東アジアや日本に関する講義を聞いている際に、日本人と交流を



(図書館の様子)

持ちたいという理由で、私に話しかけてくれる学生もいた。彼は授業のノートを見せてくれたり、一緒に宿題をやったりと講義を進める上で非常に心強かった上、同じ学年として交流を深めることもできた。また、寄宿舍で同じ部屋になった現地の先輩とも仲良くなり、日々の生活のことなどを助けてくれた。彼とは、他の友人に先立って、日々の生活での会話の全てを韓国語のみでしていたので、自身の韓国語能力を向上させる上で一番の効果があつたと思っている。さらには、ソウル大学校に共に留学した東大生や他の大学の日本人同士でコミュニティーをつくり、韓国の学生を交えて交流することもあつた。留学当初は体調を大きく崩してしまっていたので、様々な人との交流を深められるか非常に不安だったが、学生が気さくに話しかけてくれ、途中からは自らも積極的に関係を築こうと変化して行つたので、結果として非常に交友関係に恵まれ、留学のトラブルも乗り越えられたと思っている。

また、ソウル大学校の施設やサービスについても言及したいと思う。ソウル大学校では図書館や自習室などが夜遅くまで開店しており、各所で Wi-Fi やコンセントなどの設備も充実していた。さらにキャンパス内には、コピー屋、文具屋、コンビニ、カフェが点在しており、一つの街のように機能していた。このように、キャンパスに多くの機能が詰まっている分、敷地は非常に広大であった。時には校内の移動だけで寄宿舍から歩いて20分を要する場合もあるが、無料バスも運行しており、また文理や学部によってエリアが分かれていて、似たような授業を取れば移動距離は短くなるので、思ったよりは移動に苦労しなかった。また、寄宿舍は、キャンパス内にあるため、都市部に出なくても、キ

キャンパスの中だけで生活を完結させることもできるほどだった。寄宿舍は古くて安い宿舎と新しいが高い宿舎のうちから選べ、大抵の場合は2人部屋で、1人や大部屋などにも対応していると聞いた。私も上記の通り、2人部屋で生活した。同居人が何語を話すかは運次第ではあるが、韓国語や英語、中国語など部屋ごとに様々な言語が行き交っており、宿舎内で交流を広げることが可能だ。規則も一般のアパート程度で特段気にしなければいけない点はないが、同居人と事前にルールを決めるか否かでどれだけ仲を深め、快適な生活ができるかが変わってくると思った。



(釜山)

このような生活環境の中で、私は平日には主に学校の図書館や寄宿舍の中だけで勉強をしたり、友人と話したりした。一つの講義における宿題の負担は言語やそもそもの量の違いから東大の前期教養よりは何倍も大きかった。そのため、平常時は3時間、テスト期間は夜遅くまで何時間も勉強していた。ただ、上記の通り、一人よりかは何人かで一緒に勉強する機会が多く、勉強に集中出来る環境が整っているため、韓国の教育としてイメージしていたほどスパルタ的な厳しさは感じなかった。また、休日には、友人と出かけたり、一人でソウルの街を歩いたりしていた。大学からバスに乗ると、ソウル大入口駅やナクソンドンデ駅にすぐ着くため、その周辺の食堂やカフェ、コインカラオケ等で遊ぶことが多かった。また、カンナムやチャムシル、コエックス、コソクターミナルといったエリアが大学からは遠くない場所にあるため、大きな買い物をしたり、イベントに出向いたりする時によく利用した。ただ、明洞や東大門などがある漢江の北側には行く機会が少なく、留学を終えてもまだ訪れきれていない地域も多く残っている。

そして学期が終了した6月には、一緒に留学をした友人と、次の学期に東大に留学に来る韓国人学生と先生方を交えて、釜山で研修を行った。日本と旧来から交流の多かった釜山では、博物館や、街中で簡単に日本と関係のある資料や造形物を見つけることができ、日韓の交流に詳しい先生から説明を受けた。また、ソウルとは違い、海の幸が豊かな釜山ならではの海鮮料理を親しみながら、留学最後の思い出を作ることができた。

5. 韓国語

参考として、私は留学前の時点で、韓国語中級のクラスのレベルだったため、ニュースやドラマでも知っている単語が断片的に聞こえるものの、内容を理解できない程度、限られた文法と単語で難しい単語を簡単に表現して（からすを黒い鳥というように）ゆっくりと物事を伝えられる程度であった。それが、前学期までには、辞書を引きながらニュースや論文を理解することはできるようになり、発表やアカデミックライティングのスキルが不足しているという程度になった。そして今学期私は語学の学校には通わず、韓国語での授業と日常会話を通じて韓国語を学んだ。授業のようなアカデミックな韓国語に関しては、前学期で大学の講義に追いつくための韓国語授業を取っていたことや、韓国語と日本語は文法と語彙が非常に似ていることなどから、やってみると発表やレポート作成の技法はあまり違いがなかった。そのため、むしろアカデミックな言葉と日常表現をうまく区別することが重要であった。学期当初は6割程度が聞き取れる程度で、友人や教授に聞きながら補完していたが、段々とスピードに慣れ、リスニングをすることによる疲労を感じなくなったことで初出かつ類推しづらい単語を除いては大部分の内容は聞き取れるようになっていた。講義で使用する資料などを事前に確認することなどによって、単語に馴染むことが重要であると気付き、習慣的に行うように心がけていた。ただし、発話やレポートに関しては、アカデミックな用語と日常表現の区別がまだ至っておらず、減点されたり、友人に直されたりということが最後まであった。今後、韓国語の書籍や講義映像に見られる表現を確認しながらこれから補完できたらと思っている。

ただ、韓国語の講義は主に漢字語で展開されるので、リスニングとしてはむしろ一番理解しやすい方だったが、日常会話で日本の大和言葉に当たるような韓国固有の言葉や言い回しを聞き取ったり、発話したりすることが一番難しかった。そのため、今まで日本語や英語で話していた友人にも韓国語だけで接するようにし、おしゃべりについていけるように心がけた。その後、学期中盤までには、相手に聞き返すことも減り、伝えたいことを一番簡潔な文法で話す程度までは伸びた。しかしながら、まだ固有の言い回しを覚えておらず、韓国の

テレビ番組や韓国語ネイティブ同士の会話などでは聞き取れない部分もあり、まだまだ勉強が必要だと感じている。そして、学期が終了する前の5月末頃に、TOPIK の6級を受験し、後日合格の判定をもらった。しかし、その試験の結果を見てもライティングやスピーキングといった表現の部分では1年の留学では足りないというふうを感じつつ終わってしまい、日本でもより良い表現ができるように勉強する必要があると痛感している。

6. 最後に

このように10か月の短期留学を経験して、もともと目的としていた韓国語の能力の向上や韓国の文化に関する知識を期間の長さに比べても十分に得ることができたと思っている。しかしながら、10 か月ではある程度の満足感を得ることができた一方で、帰ってきてもお学ぶことは常に残り、増え続けており、この経験を思い出しながら、さらに韓国語や自分の専攻に取り組みたいと思う。また、韓国の生活、友人を通して得た良き思い出を心に刻み、さらに発展させられるように韓国との交流に関わり続けていきたいと思う。